

汗かき阿弥陀 客仏といわれる由縁

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

宇都宮市西原小学校の東に一向寺と称する時宗の寺がある。本堂の南にコンクリート造りのお堂の中に立派な仏像が祭られている。通称「汗かき阿弥陀」といわれる銅造阿弥陀如来坐像である。汗かき阿弥陀と親しみを込めて呼ばれるのは、大事件の起こる前には汗をかくという言い伝えがあるからである。銅製の仏像が汗をかくというのは何とも不思議なことであるが、空気が異常に湿気を含んでいる夏の日などには、室内に安置されている冷たい仏像の肌に湿った空気が触れて、そこに水滴を生じることがあり、それが非常時に多くの人の眼についたことによるものではないかといわれている。ちなみに寺の記録によればここ百年間では大正十二年の関東大震災の時に汗をかいたという。

趣旨・発願者名・発起人名・造仏に関係した結縁者名等、判読可能な文字だけでも一二九の文字が陰刻されている全国でも珍しい仏像であるところから国の重要文化財に指定されている。

このように立派な仏像にもかかわらず汗かき阿弥陀は、本堂の傍らのお堂の中に、いわゆる客仏として安置されている。というのも汗かき阿弥陀は、もともと一向寺の本尊ではなかったからである。

実のところ汗かき阿弥陀は、かつて一向寺に隣接してあった長楽寺の本尊であった。長楽寺は、一向寺四世行蓮上人が、一向寺の末寺として下河原に建立したものである。そのため長楽寺と一向寺とは関係深く、一向寺の住職が長楽寺の住職を兼務したものであった。ところが慶長三年（二五九八）、長楽寺は下河原より西原の一向寺に隣接して移され、さらに明治二年長楽寺は廃滅さ



銅造阿弥陀如来坐像・通称汗かき阿弥陀



一向寺本堂

れた。そこで、本尊の汗かき阿弥陀は客仏として一向寺へ移されたのである。

ところで先に述べた陰刻された一二九の文字によれば、汗かき阿弥陀は応永十二年（一四〇五）、宇都宮氏十二代の満綱が願主、一向寺住職の忍阿が發起人となり造られたものである。また、この像の右肩には「善導大師」や「良忍上人」あるいは「源空上人」の文字が見える。源空上人とは浄土宗の開祖法然上人のことであり、善導大師は浄土宗五祖の一人であり、良忍上人は融通念仏衆の祖である。こうした浄土衆の高僧の名前が記されていることから、当時宇都宮の地において鎌倉新仏教の一つである浄土信仰の力が次第に高まっていたことが窺える。

さて、この仏像の作者であるが、像の背面に「応永十二年乙酉四月二日 大工秦景重」とある。大工とあるが今日いう建築職にある大工ではなく、工匠の長をいい、秦景重なる人物は鋳物師であった。作風から宇都宮駅前にある宝蔵寺の通称およりの鐘も秦景重の作ではないかといわれており、実物は存在していないが、二荒山神社に納められた狛犬像もあった。ともあれ秦景重なる人物は、十四世紀の後半から十五世紀にかけて宇都宮を中心にかけて活躍した鋳物師であったようだ。鋳物といえば佐野天命が有名であるが、彼らの活躍から宇都宮でも鋳物業が盛んであったことが窺い知れるのである。